



応用力は想像力

長谷川 真理子

総合研究大学院大学 学長

本年4月より、総合研究大学院大学の学長に就任しました。分子研も、総研大を構成する基盤機関の一つでありますので、これからどうぞよろしくお願いたします。

総研大は、とても変わった大学院です。研究所は世界最先端の研究をすることが使命であり、先生たちは実におもしろい、優れた研究を行なっています。その研究現場で博士課程の教育を行うというのが総研大の設立理念なのですが、それは簡単なことではありません。自分の専門分野の研究を行うことと、大志を抱いてはいるけれどもまだ未熟な院生たちを指導することとは、かなり異なる仕事だからです。

研究者は、自らがチームを率いて研究を進めていける能力を持った人々です。分野を熟知し、今何が問題なのかを知り、それを解決するための想像力を備えています。そして、大きな研究課題をいくつかの細かい課題に整理し、それぞれの研究結果を総合的に判断し、次の研究計画を立てます。こういった能力がなければ、研究所の研究者としては成り立ちません。

さて、院生に対する教育はどうでしょう？ 大学院生は、もちろん、入試を経て採用することに決めた人たちですから、それなりのハードルは越えてい

ます。それでも、多くは20代前半の可塑性の高い時期にある人たちで、さまざまな潜在能力は備えているものの、知識が十分でない、研究の方向性がまだわからないなど、つまりは研究者の「素材」です。このような人たちをどうやって開花させるか、どうやって潜在能力を一番よい方向に引きだすか、それが教育というものですが、この仕事は、研究を進めることとは、実は非常に性質の異なる仕事です。

研究対象、研究課題が困難でうまくいかないという苦労は、どの研究者も必ずや日々直面する問題です。しかし、院生の指導がうまくいかないというのは、純粋に研究上の問題ではなく、院生と先生というそれぞれ異なる人間どうしの社会関係の問題を含んでいます。だめだと思っていた院生が数年後に脱皮することもあれば、すごいと思っていた院生が開花しないこともあります。研究者ではなく、まったく違う分野で人生を切り開いていくこともあります。教育とは、他者の人生を左右することを含み、また、他者の人生を先生がコントロールすることは到底できない、という限界も含んだ作業なのだと思います。

私自身は、これまでに研究にも教育にもたずさわってきましたが、今は、

大学の運営というまったく異なる仕事をするようになりました。研究と教育が異なるように、大学の運営という仕事も、前2者とはまったく異なります。そこで思うのですが、異なる性質の仕事をするときに重要なのは、応用力です。一つの分野でうまくいったやり方の何がうまくいく要素だったのか、それを一段階上に抽象化し、他の分野にも応用できるものとして使う力が必要なのです。

そして、応用力の根幹にあるのが想像力だと思います。ある一地点からだけではなく、異なる地点から見たら世界はどう見えるか、研究の発展にも、教育にも、大学運営にも、もっとも大事なのはそういった想像力なのではないかと思うこのごろです。

はせがわ まりこ

総合研究大学院大学 学長

昭和51年東京大学理学部生物学科卒。

昭和58年東京大学大学院理学系研究科人類学専攻博士課程修了。

タンザニア野生動物局、東京大学理学部人類学教室助手、専修大学助教授・教授、Yale大学人類学部客員准教授、早稲田大学政治経済学部教授を経る。

平成18年総合研究大学院大学教授。

平成19年先端科学研究科生命共生体進化学専攻長。

平成23年先端科学研究科長。

平成29年4月現職。
